

〔査読論文〕

感情伝達における 接触チャネルの使用に関する研究^{1),2),3)}

曹 美 庚

要 旨

本研究は、感情伝達における非言語チャネルの使用について、北米で行われた先行研究の知見を踏まえ、日本と韓国で実験的な検討を行い、接触チャネルの使用における文化的相違を明らかにすることを研究の目的とする。日本人大学生119名と韓国人大学生123名を対象に、12感情の伝達における非言語チャネルの使用行動に関する実験を行った。感情伝達時の非言語チャネルの使用については、認知的に優先する「選好チャネル」と、実際の感情伝達において行動的に用いる「主チャネル」という2つの側面から分析を行った。分析の結果、日本では愛と同情の2つの感情、韓国では同情の感情において、接触チャネルが「選好チャネル」かつ「主チャネル」であることが確認された。韓国の場合、愛と感謝の感情においては、主チャネルが2つ（接触と顔）という結果が出ており、同情の感情同様、愛と感謝の感情においても、接触チャネルが「選好チャネル」かつ「主チャネル」であることが明らかとなった。また、感情伝達時の接触チャネルの使用度に文化とパーソナリティが有意な影響を及ぼしており、日本より韓国の方で接触チャネルが多く用いられ、外向性が高いほど接触チャネルが多用されるという結果も示された。接触チャネル使用度における日韓差は外向性が低いほど顕著に現れた。異文化理解の促進と有効な異文化コミュニケーションのためには、感情伝達における選好チャネルや主チャネルの存在と、文化やパーソナリティが接触チャネル使用行動に及ぼす影響に関する十分な理解が必要といえる。

キーワード：感情伝達、接触チャネル、異文化、外向性、非言語コミュニケーション、感謝

対人コミュニケーションにおける非言語コミュニケーションの役割は大きい。とりわけ、感情の伝達においては、顔の表情、声、姿勢、接触などの非言語チャネルが言語よりも有効なコミュニケーション手段となりうることが多い。人々の様々な感情はどのような非言語チャネルによってより有効に伝えられるのか。これまでの感情研究から、北米においては、個人がコミュニケーション相手に対して自分の感情を伝達するために用いる非言語チャネルには優先性が存在し、感情によってより重点的に使用される非言語チャネルが異なることが示された (App et al., 2011)。

また、非言語チャネルの一つとされる身体接触との関連では、接触文化と非接触文化の間で身体接触の度合いに相違があることや、同一文化圏内であっても、性やパーソナリティ特性が接触性向に影響を及ぼすことなどが報告されている (曹・釘原, 2016; DiBiase & Gunnoe, 2004; Hall, 1966; Jourard, 1966; Richmond & McCroskey, 2004)。

本研究では、感情表出および伝達（以下、感情伝達）におけるチャネル優先性について、アジア文化圏においても先行研究と同様の結果が得られることを確認した後、接触チャネルの使用度に及ぼす文化、性、パーソナリティの影響

について日韓比較の観点から検討を行う。

感情伝達と非言語チャネル

感情に関する研究は、主として顔の表情や声を中心に行われてきた(e.g., Ekman & Friesen, 1971; Izard, 1971; Knapp & Hall, 1997; Scherer et al., 2003)。これまでの研究から、軽蔑・悲しみ・恐怖・嫌悪・怒り・喜び・驚きの感情(Ekman, 1993; Ekman & Friesen, 1975; Ekman & Rosenberg, 2005)や、恥・当惑などの感情(Keltner & Buswell, 1997)は顔の表情と声によって表出されることが明らかとなった。ただ、実際の感情伝達においては、顔の表情や声以外にも、姿勢や体の動き(e.g., 荒川・鈴木, 2004; Atkinson et al., 2004; Coulson, 2004; Keltner & Harker, 1998; Tracy & Robins, 2004)、身体接触(Hertenstein & Campos, 2001; Hertenstein et al., 2006; Hertenstein et al., 2009; Jones & Yarbrough, 1985)などのチャネルを併用することによって感情を伝達することが多い。その際、1つの感情を伝達するために複数のチャネルが同時かつ同等な重みで用いられるわけではなく、感情によってより重点的に使用される優先チャネル(以下、主チャネル)が存在すると考えられる(App et al., 2011)。

App et al. (2011) は、感情伝達における非言語チャネルとして、身体チャネル(body channel)、顔(の表情)チャネル(face channel)、接触チャネル(touch channel)の3つを取り上げ、感情を社会的ステータスと関連する感情(罪悪・恥・誇り・当惑)、サバイバル重視の感情(喜び・悲しみ・恐怖・嫌悪・怒り)、親密関係の感情(愛・同情)といった3つのグループに分類した上で、社会的ステータスと関連する感情では身体チャネルが、サバイバル重視の感情では顔チャネルが、親密関係の感情では接触チャネルがそれぞれ主チャネルであることを明らかにした。

感情と身体接触を関連付けた研究は数少なく、感情コミュニケーションにおける接触チャ

ネルの役割はあまり注目されてこなかった。ポジティブ感情とネガティブ感情の観点から感情の快樂価値(快・不快)を伝達するという立場の研究や、顔や声による感情表示の強度を単に増幅するという立場の研究がほとんどである(Hertenstein, 2005; Hertenstein & Campos, 2001; Jones & Yarbrough, 1985; Knapp & Hall, 1997)。前者では、暖かさや親密感を伝達する肯定的な身体接触と苦痛や怒りを伝達する否定的な身体接触など、快・不快の感情を伝達する手段として身体接触が研究された。後者では、身体接触という触覚刺激が個別に感情を伝達するというよりも、身体接触が他の形式による感情的表示を強化する役割を果たすに過ぎないと考えられた(Knapp & Hall, 1997)。

しかし、その後の研究において、Hertenstein et al. (2006) は、異なる感情は異なる身体接触タイプによって伝達されるとし、例えば、同情はなでるか軽く叩く、怒りは打つか絞りつねる、嫌悪は押す、感謝は握手する、恐れは震える、愛はなでるなどが有効であることを示すとともに、観察者が他の人が行う身体接触を見るだけでその人が伝達しようとする感情を識別でき、身体接触タイプによって怒り・恐れ・嫌悪・愛・同情・感謝の感情を明確に解読可能であることを明らかにした。多くの感情が身体接触によって伝達できることを示唆する研究結果といえる。

また、Keltner et al. (2006) は、相互提携を行えそうな人たちを識別したり、利他主義的で協調的な行為をした人たちに報いる際に、身体接触が他者との親密関係を構築する重要な役割を果たすと報告しており、Hertenstein et al. (2009) も、4つのネガティブ感情(怒り・恐怖・悲しみ・嫌悪感)と4つのポジティブあるいは向社会性感情(幸せ・感謝・同情・愛)を身体接触によって伝達する実験を実施し、協調や利他主義と関連する向社会性感情である愛・同情・感謝の感情は、顔や声よりもむしろ身体接触によってよりうまく伝達できることを明らかにした。なかでも感謝の感情は、相手から何ら

かの恩恵を受けることによって認識される感情であり (Froh & Bono, 2008; 大平, 2010; 北村, 2002), 喜びや嬉しさを含んだ肯定的感情と罪悪や負債感を含んだ否定的感情の両方を併せ持つ複合的感情として捉えられている (Layous et al., 2013; 藤澤・内藤, 2015; 蔵永・樋口, 2011)。そのため, 感謝の意味合いには文化的背景による相違が想定され (池田, 2017; 唐澤・官, 2010), 感謝は異文化間コミュニケーションの文脈ではとりわけ重要な感情の一つであると考えられる。

接触チャネルの使用における文化, 性, パーソナリティの影響

身体接触は気持ちや感情を伝えるためのもっとも効果的な手段である (Richmond & McCroskey, 2004)。人々は接触によって相手を気遣ったり, 尊重したり, 相手に興味を持っていることを知らせることができ, 愛, 思いやり, 温かさ, 怒り, 喜び, 悲しみなどの多様な感情状態を伝えられるが, 接触の意味合いは文化によって異なっている (Frank, 1982; Gudykunst & Kim, 1997; Klopff, 1998; Richmond & McCroskey, 2004)。

文化と身体接触との関連では, 文化を非接触文化 (noncontact culture) と高接触文化 (high-contact culture) に区分し, 各々における身体接触行動の特徴や異質な文化間の違いなどを議論する研究が多く行われてきた。一般に, 非接触文化には, 北欧, 北米, アジアの文化が含まれ (e.g., DiBiase & Gunnoe, 2004; Mazur, 1977; Thayer, 1988), 高接触文化には, 中東, 南米, 南欧の文化が含まれるとされる (e.g., Hall, 1966; Hall & Friedman, 1999; Lustig & Koester, 1996)。

ただ, 同じ非接触文化圏に分類されたとしても, 日常的な挨拶をお辞儀で交わすアジア文化圏より, ハグやキスで挨拶を交わす欧米圏は相対的に高接触文化といえる。同様に, アジア文化圏内にも異質性が存在しており, 日本は典型

的な非接触文化として, 韓国は相対的に高接触文化として分類される可能性がある。Barnlund (1973) の日米比較や Hatta & Dimond (1984) の日英比較, 呉・宇津木 (2008) の日中比較, 曹 (2016) と曹・釘原 (2017, 2018) の日韓比較などから, 同じ非接触文化に分類される英米中韓よりも日本は身体接触の度合いが低いことが明らかにされている。また, 日本人は, 家族や親友といった親密な関係にある相手に対してさえ身体接触をしないという文化的特徴があるともいわれている (川名, 2008)。反面, 韓国では身体接触到に寛容的な文化が存在し, 女性同士が手をつないで歩いたり, 腕を組んで歩いたりすることが多く, 男性も気さくによく接触する傾向があるなど, 身体接触は日常的に行われる重要なコミュニケーション手段の一つとして積極的に活用され, かつ重要な役割を果たしていると考えられている (曹, 2010, 2016; 曹・釘原, 2017, 2018; 林, 1984; 大崎, 2006)。

これらの先行研究を踏まえると, 非接触文化として分類されるアジア文化圏の中でも, 日本と韓国は身体接触の度合いに違いがあり, その違いは感情伝達における接触チャネルの使用行動にも違いをもたらすと推察される。

また, 性と身体接触との関連では, 男性より女性の方が接触性向が高く (e.g., Jourard, 1966; Remland et al., 1995), 身体接触をより好意的に評価しており (Fisher et al., 1976), 男性より先に身体接触を始めることが多い (Stier & Hall, 1984) といった結果が報告されている。女性の方が接触性向が高いことは日本と韓国の調査結果にも表れている (相越, 2009; 曹, 2010; 曹・釘原, 2017; 鈴木・春木, 1989)。

さらに, パーソナリティと身体接触との関連では, 外向性と自己開示との正の相関 (Levesque et al., 2002; Sophie & Debora, 2015), および自己開示と身体接触との正の相関 (Barnlund, 1973; Jourard & Rubin, 1968; Pedersen, 1973) から, 外向性と身体接触との正の関係が導かれる。両者の関係を質問紙調査によって明らかにした曹・釘原 (2016) の調査結果

からは、親しみを伝え合う際に、外向性が高い人ほど身体接触を多く用いて人間関係を構築している可能性が高いことが示唆された(曹・釘原, 2016)。外向性は非言語的関与や接触性向と深い関わりを持つと考えられており(曹・釘原, 2016; Patterson, 2011 大坊監訳, 2013), 感情伝達においても、外向性が接触チャンネルの使用行動に影響を及ぼす可能性は高いと推察される。

本研究の目的

肯定的な身体接触は対人関係において親密化を促進する上で大きな役割を果たし(曹・釘原, 2016, 2017; 川名, 2008; Feldman et al., 1991; Jourard, 1966), 異文化間コミュニケーションの場面では主要なコミュニケーション手段の一つとなりうるが、文化によって身体接触の意味合いは異なっている(Frank, 1982; Gudykunst & Kim, 1997; Klopff, 1998; Richmond & McCroskey, 2004)。その相違を前提に異文化間コミュニケーションが図られる限り、互いに理解を示し合うことによって誤解は回避できる。ところが、日本と韓国のように、類似性の高い文化間のコミュニケーションにおいては、共感性が高いという良さもあるが、相違が十分想定されずコミュニケーションが図られ、意図せぬ誤解やコミュニケーション・トラブルを招くことがある。その場合、コミュニケーションに対する共感性や期待値が高いがゆえに、誤解はむしろ大きくなり、相違の受け入れにも時間がかかってしまう。そのため、接触行動と接触の意味合いの相違が持つ異文化コミュニケーション上の含意を明らかにすることは重要である(曹・釘原, 2016; Richmond & McCroskey, 2004)。

Hofstede (1983, 1985) の4つの文化次元から成る指数を使って、2つの国の間で国民性がどのくらい離れているかを計算したコグート=シン指数によれば、日本と韓国の国民性の距離はかなり離れており、日本から近い順に数えて韓国は69カ国中39番目(コグート=シン指数

は2.59)の国となっている(入山, 2012)。日本と韓国は同質文化圏に属しているものの、実はかなりの異質性が存在する可能性があることを示唆する結果といえる。

それ故、コミュニケーション研究において、実証的な方法を用いた隣接文化同士の比較研究の蓄積を通じ、同質文化圏に属する類似文化間の異質性を明らかにし、その含意を検討することは異文化コミュニケーションにおいて重要な意味を持つ。本研究が意図している日韓比較は、この「同質文化圏(東アジア文化)内の異質性の追究」に焦点を合わせた研究の一環として位置づけられる。

先行研究を踏まえると、感情によって主チャンネルが異なり、接触チャンネルの使用行動に文化、性、パーソナリティが影響を及ぼす可能性があることが推察される。そこで、本研究では、感情伝達における3つの非言語チャンネル(顔・身体・接触)に注目し、App et al. (2011) が取り上げた3つの主チャンネルの区分が、アジア文化圏においても同様に成り立つことを確認した上で、感情伝達時の接触チャンネルの使用について探索的な検討を行う。すなわち、本研究は、北米で実施された感情伝達における主チャンネルの役割に関する先行研究の知見を踏まえた上で、接触チャンネルが優先される感情には洋の東西を問わず普遍性が存在することを確認した後、感情伝達時の接触チャンネル使用行動に文化、性、パーソナリティがどのような影響を及ぼすのかについて日本と韓国で実験的な検討を行い、接触チャンネルの使用における文化的相違を明らかにすることを研究の目的とする。

方法

実験の概要

実験参加者

日本では関西地方の2大学、韓国ではテグ地方4大学の学部生を対象に実験を行った。実験に先立って、参加者には研究の概要や研究倫理

に関わる事項全般について口頭で説明を行った。具体的には、実験への参加が自発的なものであり、いつでも参加を中止できることや、その場合にいかなる不利益も生じないこと、実験参加者のプライバシー保護のため、データ処理や論文記述の際に匿名性を保障することなどについて説明し、自筆サインによる実験参加同意を得た⁴⁾。実験に最後まで参加できなかった人、ビデオ分析を拒否した人、ビデオ映像に技術的問題があった人、感情伝達度の回答に不備があった人などを分析対象から除外し、日本119名(男子38名, 女子81名, $M=19.48$ 歳, $SD=1.13$), 韓国123名(男子60名, 女子63名, $M=20.52$ 歳, $SD=1.84$)を分析対象とした⁵⁾。なお、参加者は任意参加の形で集められ、一定の報酬が支払われた。

実験感情

各感情ごとのコミュニケーション送信者の感情伝達に焦点が当てられ、送信者が意図した感情を伝達する際にどの非言語チャンネルが用いられるのかが調べられた。App et al. (2011) で取り上げられた11感情にHertenstein et al.

(2006, 2009) で取り上げられた感謝の感情を加え、12の感情(恥・誇り・罪悪・当惑・悲しみ・恐怖・嫌悪・怒り・喜び・愛・同情・感謝)を実験感情として用いた。感謝の感情を追加したのは、感謝の意味合いには文化的背景による相違が想定され(池田, 2017; 唐澤・官, 2010)、感謝は異文化間コミュニケーションの文脈ではとりわけ重要な感情の一つと考えられるからである。

実験道具

感情を伝達する相手として実物大の全身可動マネキン⁶⁾(男女サンドールSD206, SD106)が用いられた。柔らかいウレタン素材のマネキンは、目や口がなく感情的に中立的な顔立ちであった。自然さを演出するため、カジュアルな服装をさせ、椅子に座らせた状態でスタンバイさせた(Figure 1)。感情を伝達する相手として、参加者同士のペアや実験協力者を起用するのではなくマネキンを利用したのは、受け手の感情や反応が実験参加者に及ぼす影響をコントロールするためであった。

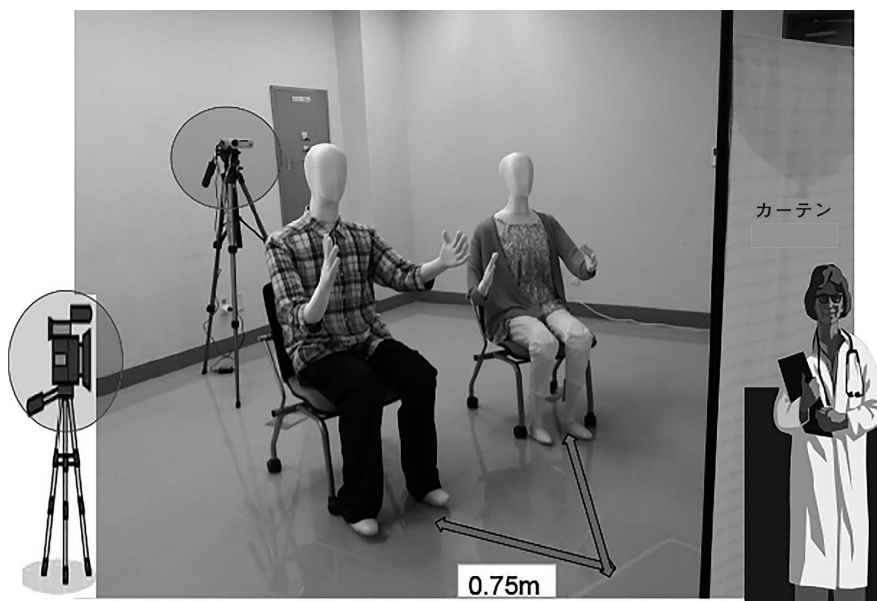


Figure 1 実験室の様子

実験手続き

本実験は、App et al. (2011) の実験手続きに基づいて構成された。参加者には、実験室に入る前に実験の流れについて説明を行い、実験過程がデジタルビデオカメラ (HDR-CX370, SONY) に録画されることや、実験途中であっても実験参加を止められることを伝え、画像の分析や使用について承諾を得た。実験室に入った参加者には、まず、感情伝達の相手として、恋愛関係にある人以外で12感情をあらわに表出できる自分と親しい関係にある誰かを想定させ、その人の性別、年齢、参加者との関係などの個人情報について、質問紙に回答を求めるとともに、マネキンをその人に見立てるよう指示した。その後、擬人化したマネキンに簡単な挨拶と話し掛けを行わせた。

App et al. (2011) 同様、1つの感情に対し少なくとも3秒以上かけ、声を使わずなるべく自然に感情を伝達すること(相手がその感情を識別できるように)、感情伝達の方法には正解や不正解は存在しないことなどを伝えた。実験の実施に先立って、実験で提示される感情とは無関係の3つの感情(欲求不満・混乱・称賛)について、事前に録画された動画を用いて感情伝達の例を示した⁷⁾。次に、参加者に「称賛」の感情を表出するよう求め、感情伝達の練習を行わせた。

実験では、参加者自身がノートパソコン (VAIO) のエンターキーを押すことで12の感情語が画面上にランダムに提示されるようにし、各参加者に12感情すべての感情伝達を行わせた。参加者には、マネキンから75cm離れた指定の位置⁸⁾に立って提示された各感情の伝達を開始するよう指示し、感情を相手によりうまく伝達できるのであれば、指定の位置から自由に動いても構わないと伝えた。また、各感情伝達を行った直後に、当該感情がうまく伝達できた(相手がその感情を理解した)と確信する程度について、参加者に5件法(1全く伝えられなかった、5よく伝えられた)で自己評定を行

わせ、感情伝達の出来(以下、感情伝達度)を測定した。

実験過程は2台のデジタルビデオカメラに録画された。1台目は正面から参加者の顔と上半身に焦点を合わせ、2台目は側面から参加者の体全体の動きに焦点を合わせた。周囲の目を気にせず自然に感情伝達できるよう、参加者が実験に参加している間、実験者はスクリーン・カーテンの裏で待機した (Figure 1)。

その他の測定変数

パーソナリティ

実験に参加した参加者を対象に、実験終了後にパーソナリティ特性としての外向性(5項目、 $\alpha = .83$)を質問紙により調査した。並川ほか(2012)のBig Five短縮版を用い7件法で尋ねた。

認知的なチャネル選好

各感情別に、実験時に想定したのと同じ相手に対し1つのチャネルのみで当該感情を伝達するとしたら身体、顔、接触のうちどのチャネルを選択するかを調べることで、感情ごとの認知的なチャネル選好を確認した。ただし、チャネル選好に関する質問紙調査が上記の実験結果に影響しないよう、実験終了後に質問紙への回答を求めた。

なお、日本語版と韓国語版の質問紙については、第3者によるバックトランスレーションの手続きを経て等質性と整合性を確保した。

結果

感情伝達の相手と感情伝達度、およびチャネル判定の信頼性

感情伝達の相手と感情伝達度

本実験において、感情伝達の相手として同性親友を指定した参加者は、日本89名(74.79%)、韓国90名(73.17%)であり、母親を指定した参加者は、日本18名(15.13%)、韓国17名(13.82%)

Table 1 感情伝達度の記述統計

感情	日本 ($n = 119$)		韓国 ($n = 123$)	
	M	SD	M	SD
恥	3.75	.94	2.97	1.01
誇り	3.06	1.11	3.42	1.07
当惑	3.77	.89	3.05	1.06
罪悪	3.99	.89	3.56	1.08
悲しみ	3.96	.84	3.24	1.09
恐怖	3.49	.92	3.02	1.02
嫌悪	3.75	.86	3.59	.90
怒り	4.03	.78	3.85	1.02
喜び	4.19	.74	3.76	.99
感謝	4.24	.72	3.89	.90
愛	3.96	.97	3.56	1.13
同情	3.98	.78	3.94	.75

であった。その他の相手としては、兄弟姉妹や父親が挙げられたが、日韓ともに、感情を伝達する相手として同性親友を選択した割合がもっとも高かった。5件法で自己評定させた感情ごとの感情伝達度の平均値は、韓国の「恥」($M = 2.97$, $SD = 1.01$)を除く日韓のすべての感情において5件法の中点である3よりも高い値が得られており、実験において各々の感情伝達は概ね問題なく行われたと判断した (Table 1)。

コーディングによるチャネル判定

感情伝達に用いられた非言語チャネルのコーディングは、本研究の目的を知らされず、かつ参加者とは面識のない2名のコーダーによって行われた。コーダーの文化的背景がバイアスにならないよう、日本と韓国の両文化を熟知していることをコーダーの要件とした⁹⁾。2名のコーダーは、本研究とは別の感情伝達場面の映像を用いて、非言語チャネルの使用判定のトレーニングを行った。コーディングにおいて2人の判断が異なる部分は両者の話し合いにより調整を図った。

コーディングでは、DePaulo et al. (2003) と Ekman et al. (2002) の研究に基づいて作成した行動指標を用い、参加者の顔を含む上半身と全身が映っている感情伝達映像を12感情に区切って、それぞれについて、顔面表情・身体・接触行動の使用の有無を判定した。コーダー

は、各感情ごとに、顔チャネル(眉と額、目とまぶたの周り、頬、鼻、唇などの動き)、身体チャネル(手足・腕脚・胴体の動き、頭の動き、うなずきなど)、接触チャネル(相手への接触)の3チャネルに対し、使用されたチャネルには1点、使用されなかったチャネルには0点を与え、その得点を各チャネル使用度の尺度得点とした。なお、信頼性を表すクッパ係数は $k = .82$ で、映像判定の一致度は十分高いといえる。調査結果の分析には、IBM SPSS Statistics ver. 22.0を用いた。

感情伝達における非言語チャネルの使用度と選好度

各感情ごとに3つのチャネル使用度に違いがあることを確認すべく、感情(12)×チャネル(3)×文化(2)の3要因分散分析を行った。感情×チャネル×文化の2次の交互作用が有意であったので($F(22, 5280) = 10.21$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .04$)、下位検定として文化と感情要因の各水準の組み合わせにおけるチャネル要因の単純・単純主効果の検定を行った。その結果、日本では「感謝」以外で、韓国ではすべての感情伝達において非言語チャネルの使用度に有意差が認められた (Table 2)。使用度が有意に高い非言語チャネルを主チャネルとすると、日本の場

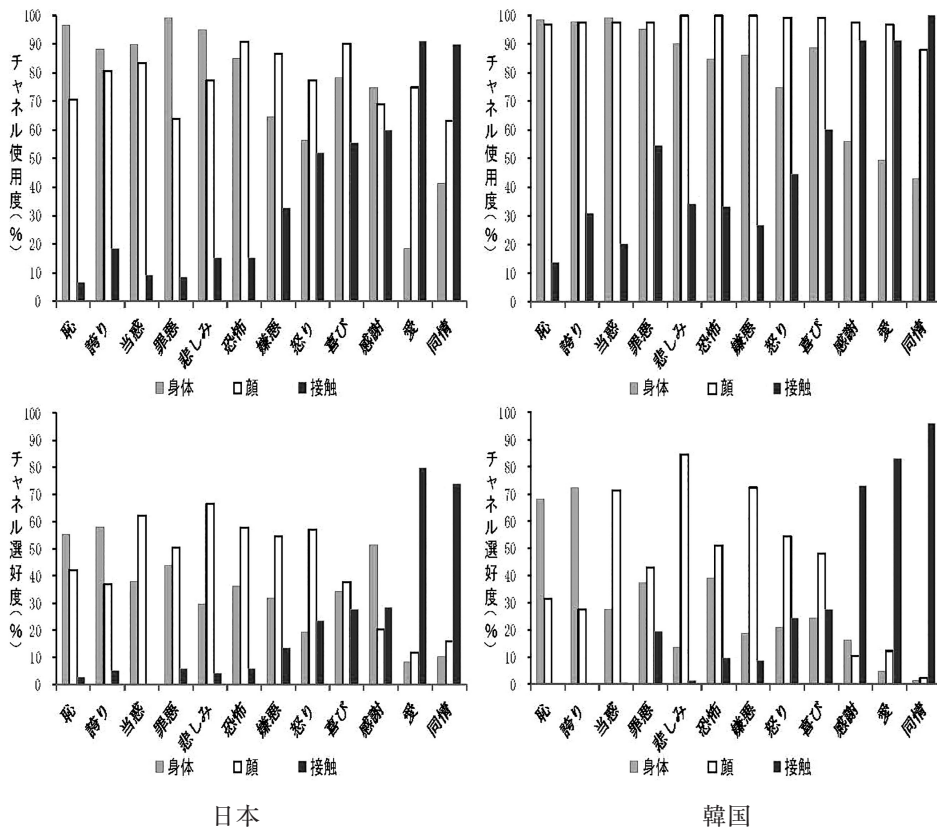
Table 2 感情ごとのチャネル使用度における有意差と多重比較の結果

感情	日本 (n = 119)				韓国 (n = 123)			
	F (2,480)	P	チャネル使用	選好チャネル	F (2,480)	P	チャネル使用	選好チャネル
恥	309.19	.000	B > F > T	B	349.11	.000	B, F > T	B
誇り	136.36	.000	B, F > T	B	142.55	.000	B, F > T	B
当惑	262.02	.000	B, F > T	F	274.55	.000	B, F > T	F
罪悪	222.34	.000	B > F > T	F	64.32	.000	F, B > T	F
悲しみ	170.05	.000	B > F > T	F	126.24	.000	F > B > T	F
恐怖	145.98	.000	F, B > T	F	103.82	.000	F > B > T	F
嫌悪	47.09	.000	F > B > T	F	100.54	.000	F > B > T	F
怒り	9.25	.000	F > B, T	F	39.09	.000	F > B > T	F
喜び	22.85	.000	F > B > T	—	31.37	.000	F > B > T	F
感謝	3.84	.022	B, F, T	B	33.99	.000	F, T > B	T
愛	122.15	.000	T > F > B	T	58.04	.000	F, T > B	T
同情	48.36	.000	T > F > B	T	75.30	.000	T > F > B	T

注) (1) Bは身体 (Body), Fは顔 (Face), Tは接触 (Touch) を表す。

(2) チャネル使用欄の多重比較は、タイプ I エラーが生じる確率を修正したボンフェローニの方法に基づく。有意差がない場合は、使用度の高い順に配置した。

(3) 日本の「喜び」の場合、チャネル選好に有意差は見られなかった。



注) 上段 Y 軸のチャネル使用度 (%) は、各チャネル使用度の平均値 (0 ~ 1.0) を百分率で表したものである。下段 Y 軸のチャネル選好度 (%) は、感情ごとに、全体を 100% としたときの各チャネルの選好割合を表す。

Figure 2 感情ごとのチャネル使用の割合とチャネル選好の割合

合、「恥・罪悪・悲しみ」は身体チャネル、「嫌悪・怒り・喜び」は顔チャネル、「愛・同情」は接触チャネルが主チャネルであった。また、「誇り・当惑・恐怖」においては、身体チャネルと顔チャネルの2つが接触チャネルより有意に使用度が高く、主チャネルは複数であるといえる。韓国の場合、「悲しみ・恐怖・嫌悪・怒り・喜び」は顔チャネル、「同情」は接触チャネルが主チャネルであり、「恥・誇り・罪悪・当惑」においては身体チャネルと顔チャネルの2つ、「感謝・愛」においては接触チャネルと顔チャネルの2つが主チャネルとなっている (Table 2, Figure 2の上段)。

次に、各感情伝達に際し、参加者は認知的にどのチャネルを選好するのかを調査した。参加者に12感情の各々について、各感情をもっともうまく伝達できると考えられる1つのチャネルを選ばせ、各感情(1)×チャネル(3)のカイ二乗検定を行った。カイ二乗検定の結果、日本($n=119$)は、喜び($\chi^2(2)=1.88, n.s.$)を除き、当惑($\chi^2(2)=7.07, p<.01$)とその他10の感情(いずれも $p<.001$)においてチャネル選好に有意差が認められた。韓国($n=123$)は、喜び($\chi^2(2)=12.05, p<.01$)と罪悪($\chi^2(2)=11.17, p<.01$)をはじめとし、その他10の感情(いずれも $p<.001$)においてチャネル選好に有意差が認められた (Table 2, Figure 2の下段)。日韓(χ^2 値は日本, 韓国の順)ともに、愛($\chi^2(2)=115.98, 137.12$)と同情($\chi^2(2)=88.96, 216.93$)の感情伝

達においては接触チャネルを選好する割合が高く、恥($\chi^2(2)=54.07, 16.46$)と誇り($\chi^2(2)=50.74, 24.59$)の感情伝達においては身体チャネルを選好する割合が高かった。また、罪悪($\chi^2(2)=41.16, 11.17$)、当惑($\chi^2(2)=7.07, 94.10$)、悲しみ($\chi^2(2)=69.85, 147.95$)、恐怖($\chi^2(2)=48.87, 33.51$)、嫌悪($\chi^2(2)=30.37, 86.05$)、怒り($\chi^2(2)=30.67, 24.93$)の感情伝達においては顔チャネルを選好する割合が高いが、感謝($\chi^2(2)=18.47, 88.44$)の感情においては、日本では身体チャネルが、韓国では接触チャネルがより選好されている。

文化、性、パーソナリティが接触チャネルの使用度に及ぼす影響

3つの非言語チャネルのうち接触チャネルにとくに注目し、文化、性、パーソナリティが接触チャネル使用度に及ぼす影響を検討した。文化、性、パーソナリティ、およびその交互作用を独立変数とし、接触チャネル使用度(12感情分の合計)を従属変数とする階層的重回帰分析を行った。質的変数である文化と性はダミー変数として用い、量的変数である外向性については、多重共線性を回避すべく、平均値を用いてセンタリングを行った。ステップ1では、文化(日本=0, 韓国=1)と性(男性=0, 女性=1)、および外向性を投入し、ステップ2では文化×性、文化×外向性、性×外向性といった交互作

Table 3 接触チャネル使用度を従属変数とした階層的重回帰分析の結果

独立変数	Step 1			Step 2		
	B	B SE	β	B	B SE	β
Step 1						
文化	1.58	.31	.32 ***	1.38	.51	.28 **
性	.25	.32	.05	.21	.47	.04
外向性	.08	.03	.06 *	.18	.06	.36 **
Step 2						
文化×外向性				-.18	.06	-.26 **
性×外向性				-.02	.06	-.03
文化×性				.42	.64	.07
ΔR^2				.03 *		
R ²	.11 ***			.15 ***		

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

用項を投入し、各独立変数の接触チャネル使用度への影響力を分析した (Table 3)。なお、独立変数間の多重共線性の問題はなかった。

階層的重回帰分析の結果、文化と外向性は接触チャネル使用度と有意な正の関連が示され、文化×外向性の交互作用も有意であった。下位検定として単純傾斜分析を行った結果、外向性が平均の場合 ($\beta = .28, p < .01$) および外向性が低い場合 ($\beta = .46, p < .001$) において、接触チャネル使用度に及ぼす文化の影響は顕著であった。なお、今回の実験結果からは、接触チャネル使用度に及ぼす性の影響は確認できなかった。

考 察

感情伝達と主チャネル

本研究の一つ目の検討課題は、感情伝達において接触チャネルが優先されるのはどの感情かというものであった。これについては、認知的に優先する「選好チャネル」と、実際の感情伝達において行動的に用いる「主チャネル」という2つの側面から分析を行った。分散分析の結果から、日本では愛と同情の2つの感情、韓国では同情の感情において、接触チャネルが「選好チャネル」かつ「主チャネル」であることが確認された。韓国の場合、愛と感謝の感情において、主チャネルが2つ (接触チャネルと顔チャネル) という結果が出ており、同情の感情同様、愛と感謝の感情においても、接触チャネルが「選好チャネル」かつ「主チャネル」であるといえる (Table 2)。

App et al. (2011) は、親密関係の感情である愛と同情の感情伝達には接触チャネルが優先されることを明らかにしており、Hertenstein et al. (2009) も、協調や利他主義と関連する愛と同情の感情は、顔や声よりもむしろ身体接触によってよりうまく伝達できることを明らかにした。今回の日韓調査の結果も App et al. (2011) と Hertenstein et al. (2009) の実

験結果と概ね一致している。日常生活の中で親しみを伝え合う際には身体接触が積極的に活用されるといった先行研究 (曹・釘原, 2017; Richmond & McCroskey, 2004) の指摘通り、日米韓の文化の相違にも関わらず、親密関係の感情である愛と同情の感情伝達には認知的にも行動的にも接触チャネルが優先される結果となった。

愛、同情、感謝以外の感情では、いずれの感情伝達においても、日韓ともに接触チャネルの使用度は身体チャネルや顔チャネルに比べ有意に低かった。本研究では、主チャネルに加え、認知的なチャネル選好をも調査しているが、日本では「罪悪」と「悲しみ」の感情において、認知的には顔チャネルを選好するものの、行動的には身体チャネルを主チャネルとして使用している様子がうかがえた (Table 2)。日本人の感情表出については、日本人は米国人より顔面表出を抑制する傾向があり (中村, 1991; Scherer et al., 1989; Matsumoto & Ekman, 1989)、西欧文化と比べると日本文化は「腹におさめる、顔に出さない」など、抑制的であるといわれている (大坊, 2007)。また、日韓比較の観点からは、「感情を抑えるところに美を感じ、感情を出すことは心の乱れ、無教養やはしたなさと解釈される日本文化とは対照的に、韓国文化では感情発散が美しいとされる」 (大崎, 2015) といった指摘も見受けられる。今回の実験においても、「罪悪」と「悲しみ」の2つの感情と関連し、感情の顔面表出を抑制する日本の特徴が部分的に表れたものと推察される。

なお、感謝の感情については、日韓において認知的なチャネル選好が異なる (日本は身体チャネル、韓国は接触チャネル) ことに加え、行動的にも韓国では接触チャネルが主チャネルの一つとなっているが、日本では3チャネルの間に有意差が見られず、主チャネルを特定することができなかった。感謝の感情は、日韓いずれにおいても、喜びや嬉しさを含んだ肯定的感情と罪悪や負債感を含んだ否定的感情の両方を併せ持つ複合的感情として捉えられる

(Layous et al., 2013; 藤澤・内藤, 2015; 蔵永・樋口, 2011)。この「感謝」の感情伝達において、日本では身体チャネルが、韓国では接触チャネルが認知的に選好され、行動的にも韓国では接触チャネルが多用されていることから、感謝の気持ちを伝え合う際にミス・コミュニケーションが起こる可能性がとりわけ高いといえる。そのため、日韓間の異文化コミュニケーションにおいて感謝の感情を伝え合う際には、両国において主チャネルが異なることを認識するとともに、互いの感謝表現に関する十分な理解が求められる。

文化、性、パーソナリティの影響

感情伝達時の接触チャネル使用行動に文化、性、パーソナリティがどのような影響を及ぼすのかというのが2つ目の検討課題であった。分析の結果、文化と外向性の主効果が有意であったことから、日本より韓国の方が、外向性の低い人より高い人の方が感情伝達時に接触チャネルをより多く用いている様子がうかがえた。また、文化と外向性の交互作用が有意であり、外向性が平均の場合とそれ以下の場合において、接触チャネル使用度の日韓差が顕著であるという結果も示された。

接触行動は、他者に対する好意や受容の表れともいわれるが (Frank, 1982; Gudykunst & Kim, 1997; Klopff, 1998; Richmond & McCroskey, 2004)、文化による接触行動の差は異文化コミュニケーションの場面で誤解を生み出す原因となることが多く、他の文化の人の感情を害する危険をも孕んでいる (曹・釘原, 2017, 2016; Richmond & McCroskey, 2004)。非接触文化の人と高接触文化の人が相互にコミュニケーションをとる場合、高接触文化の人は非接触文化の人から冷たさや距離感を感じることがあるという (Hall, 1966)。日本と韓国は同じく非接触文化圏に分類されているが、同じ非接触文化圏内であっても、身体接触度合いが有意に異なる文化間であれば同様のことがいえ

る。そのため、感情伝達においても、韓国人大学生は外向性の高低に関わらず、外向性の低い日本人大学生の感情伝達を十分解読できない可能性がある。一方、日本人は韓国人の感情伝達において接触チャネルが有意に多く使用されることから、不快感を覚える可能性がある (曹, 2010; 曹・釘原, 2016, 2017)。

とりわけ、肯定的感情と否定的感情の両方を併せ持つ複合的感情として捉えられている「感謝」の感情を伝え合う際に、肯定的感情と否定的感情の両方において接触チャネルを多用しがちな韓国人の親密で好意的な表現として用いられた接触行動が日本人には不快感のような否定的感情を与え、誤解を生じさせる可能性が高い¹⁰⁾。逆に、日本人の身体チャネルによる感謝表現は韓国人に距離感や物足りなさを感じさせるものになりかねない。本研究結果からも示唆されるように、有効な異文化コミュニケーションのためには、互いに他の文化の接触行動に関する十分な理解が求められるといえよう。

本研究の限界と課題

本研究の限界として、感情伝達における3つの非言語チャネルの使用如何に焦点が当てられ、感情伝達の強弱や各非言語チャネルの使用累積時間および頻度の分析が十分行われていないことが挙げられる。この点については、今後、実験で得たデータをより詳細に分析する必要があると考えている。韓国ドラマ等での感謝の表現からは、「負債という否定的な感情としての感謝」の表現においても接触チャネルが多用されているように見受けられることから、とりわけ感謝の感情については、精緻な実験デザインによりさらなる検証を行う必要がある。

また、マネキンを用いた実験室実験の限界として、感情表出が意識的なものであったり、感情表出自体が抑制された可能性を排除できない。木村 (2006) や山本・鈴木 (2005) の指摘のように、感情伝達が他者との関係性など二者間の相互作用によって行われることを考慮する

と、より自然な相互コミュニケーションの文脈のもとで、観察方法を用いるなどして今回の実験室実験で得た調査結果を検証することも必要といえる。加えて、感情伝達をする側のみならず感情伝達される側の視点に立ち、各感情をどの程度解読できるかを測定することによって、コミュニケーションの送り手と受け手の間の感情伝達度における認識ギャップを確認することも重要と考えている。異文化コミュニケーションの場面では、文化の違いによって、送り手はうまく感情伝達したつもりでも、受け手にとっては感情が十分に伝わっていないということも考えられるからである。感情伝達の送り手と受け手の両方を同時に考慮した上で、非言語チャネルの使用度および感情伝達度を検討することは今後の研究課題である。

もっとも、12の感情を検討することで各感情伝達には主チャネルが存在すること、愛と同情の主チャネルには文化を越えた類似性が認められること、諸感情の伝達における接触チャネルの使用度に文化とパーソナリティが影響していることなどを明らかにした点は本研究の意義といえよう。文化類似性の高い日韓間の異文化コミュニケーションにおいては、高い類似性ゆえに看過されがちな相違点、すなわち感情伝達における接触チャネルの使用度や対人コミュニケーションにおける身体接触行動の違いなどを正しく認識し、その違いに理解を示し合うことが有効な異文化コミュニケーションのためには不可欠であろう。

注

- 1) 本研究は、平成26-28年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C, 課題番号26503016, 研究代表者: 曹 美庚)と平成29-令和4年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C, 課題番号17K02997, 研究代表者: 曹 美庚)の助成を受けた。
- 2) 本研究の一部は、2020SPSP(Society for Personality and Social Psychology) Annual Convention in New Orleans, Louisianaと日本社会心理学会第58回大会(2017), 日本心理学会第78回大会(2014), および日本社会心理学会第55回大会

(2014)にて報告された。

- 3) 本論文は、大阪大学大学院人間科学研究科博士学位論文として提出された「対人コミュニケーションにおける身体接触行動に関する研究—日韓比較を中心に—」のうち、学会誌未発表の第5章を分析し直し、修正を加えたものである。
- 4) 当該実験を実施するにあたって、当時著者が大学院生として所属していた大阪大学大学院へ実験計画書を提出し、実験実施に対する倫理審査が行われ、承認された。審査承認番号は、「人間科学研究科行動学系研究倫理委員会, No. 人行 25-28」である。さらに、参加者の自筆サインによる同意書は阪南大学学術情報課に提出された。
- 5) 日韓比較を念頭に、外国籍の学生や留学生、長期海外滞在経験者などには実験参加の資格を与えなかった。
- 6) App et al. (2011)は、男女の区別がつかないカジュアルな服装をした1体のマネキンを使用して実験を行ったが、本研究の実験では男女2体のマネキンを使用した。マネキンの大きさや体形に男女差があり、カジュアルな服装だけでは1体のマネキンが両性の役割を十分果たせないと判断したためである。
- 7) 混乱は顔のみで、欲求不満は顔と身体で、称賛は身体と接触を用いて表現した。
- 8) この距離は、Hall(1976)のいう対人距離のうちの個体距離(45cm-122cm)に属する。近接相(45cm-75cm)と遠方相(75cm-122cm)の境界となる距離であり、腕を伸ばせば触れられるプライベート・ゾーンとみなされる距離でもある。
- 9) Aは日本生まれ日本育ちの韓国籍の大学院生、Bは韓国生まれ韓国育ちで、25年以上日本に在住している研究者である。
- 10) もちろん、場合によっては、意外性からくる驚きなど、異文化を感じ取る機会となり、必ずしも否定的な感情に結びつかないことも考えられる。

引用文献

- 相越麻里(2009). 身体接触の臨床心理学的効果と青年期の愛着スタイルとの関連 岩手大学大学院人文社会科学研究所紀要, 18, 1-18.
- App, B., McIntosh, D. N., Reed, C. L., & Hertenstein, M. J. (2011). Nonverbal Channel Use in Communication of Emotion: How May Depend on Why. *Emotion*, 11, 603-617.
- 荒川 歩・鈴木直人(2004). しぐさとの感情の関係の探索的研究 感情心理学研究, 10, 56-64.
- Atkinson, A. P., Dittrich, W. H., & Gemmell, A. J. (2004). Emotion perception from dynamic and static body expression in point-light and full-light displays. *Perception*, 33, 717-746.

Mar. 2022

感情伝達における接触チャネルの使用に関する研究

- Barnlund, D. C. (1973). *Public and Private Self in Japan and United States*. Simul Press, (西山 千 (訳) (1973). 日本人の表現構造 サイマル出版会)
- 曹 美庚 (2010). 対人関係における親密さとスキンシップ許容度——韓国人大学生の分析結果を中心に——九州大学大学院比較社会文化学府紀要比較社会文化, 16, 73-85.
- 曹 美庚 (2016). パーソナリティ特性とタッチング行動の関連性に関する研究, 阪南論集 社会科学編 51-2, 81-90.
- 曹 美庚・釘原直樹 (2016). 文化・性・パーソナリティが日韓大学生のタッチ性向に及ぼす影響, 日本社会心理学会第57回大会発表論文集, 103.
- 曹 美庚・釘原直樹 (2017). 親しい相手との身体接触に関する日韓比較研究 応用心理学研究, 43, 45-53.
- 曹 美庚・釘原直樹 (2018). 発達段階における親子間の身体接触に関する研究—日韓の幼稚園児と小・中学生の両親からの報告を中心に— 対人社会心理学研究, 18, 103-111.
- Coulson, M. (2004). Attributing emotion to static body posture: Recognition accuracy, confusions, and viewpoint dependence. *Journal of Nonverbal Behavior*, 28, 117-139.
- 大坊郁夫 (2007). 社会的脈絡における顔コミュニケーションへの文化的視点 対人社会心理学研究, 7, 1-10.
- DiBiase, R. & Gunnoe, J. (2004). Gender and culture differences in touching behavior. *Journal of Social Psychology*, 144, 49-62.
- DePaulo, B. M., Lindsay, J. J., Malone, B. E., Muhlenbruck, L., Charlton, K., & Cooper, H. (2003). Cues to Deception. *Psychological Bulletin*, 129, 74-118.
- Ekman, P. (1993). Facial expression and emotion. *American Psychologist*, 48, 384-392.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1971). Constants across cultures in the face and emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 17, 124-129.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the human face: A guide to recognizing emotions from facial expressions*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall. (工藤 力 (訳) (1987). 表情分析入門——表情に隠された意味を探る—— 誠信書房)
- Ekman, P., Friesen, W. V., & Hager, J. C. (2002). *Facial action coding system*. (Eds.). Salt Lake City, UT: Research Nexus.
- Ekman, P. & Rosenberg, E. L. (2005). *What the face reveals: Basic and applied studies of spontaneous expression using the facial action coding system (FACS)* (2nd ed.). NY: Oxford University Press.
- Feldman, R. S., Philippot, P., & Custrini, R. J. (1991). Social competence and nonverbal behavior. In R. S. Feldman & Rime, B. (Eds.), *Fundamentals of nonverbal behavior*. Cambridge University Press, 329-350.
- Frank, L. K. (1982). Cultural patterning of tactile experiences. In L. A. Samovar & R. E. Porter (eds.), *Intercultural Communication: A Reader* (3rd ed.), 285-289. Belmont, CA: Wadsworth.
- Fisher, J. D., Rytting, M., & Heslin, R. (1976). Hands touching hands: Affective and evaluative effects of an interpersonal touch. *Sociometry*, 39, 416-421.
- Froh, J. J. & Bono, G. (2008). The Gratitude of Youth. *Positive psychology: Exploring the best in people*. Vol. 2. *Capitalizing on emotional experiences*. Lopez, S. J., ed. London: Praeger. 55-78.
- 藤澤 文・内藤俊史 (2015). 道徳性と道徳教育 児童心理学の進歩, 54, 83-108.
- 呉 英妍・宇津木成介 (2008). 中国と日本の大学生における接触行動の発達の变化——主観的評定値に基づく比較—— 神戸大学国際文化紀要, 19, 17-28.
- Gudykunst, W. B. & Kim, Y. Y. (1997). *Communicating with strangers: An approach to intercultural communication* (3rd ed.). NY: The McGraw-Hill Companies, Inc.
- Hall, E. T. (1966). *The Hidden Dimension* (2nd ed.). Gardner, NY: Anchor Books.
- Hall, E. T. (1976). *Beyond culture*. Gardner, NY: Anchor Books.
- Hall, J. A. & Friedman, G. B. (1999). Status, gender and nonverbal behavior: A study of structured interactions between employees of a company. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 1082-1091.
- Hatta, T. & Dimond, S. J. (1984). Differences in face touching by Japanese and British people. *Neuropsychologia*, 22, 531-534, 1984.
- 林 建彦 (1984). 日本人と韓国人との表現構造比較研究——D.C. パーンランドの日・米比較を基礎として——東海大学文学部紀要, 41, 113-136.
- Hertenstein, M. J. (2005). Touch. In N. Salkind (Ed.), *Encyclopedia of human development* (Vol. 3, 1275-1277). NY: Sage.
- Hertenstein, M. J. & Campos, J. J. (2001). Emotion regulation via maternal touch. *Infancy*, 2, 549-566.
- Hertenstein, M. J., Holmes, R., McCullough, M., & Keltner, D. (2009). The communication of

- emotion via touch. *Emotion*, 9, 566-573.
- Hertenstein, M. J., Keltner, D., App, B., Bulleit, B. A., & Jaskolka, A. R. (2006). Touch communicates distinct emotions. *Emotion*, 6, 528-533.
- 平田 忠・仁平義明・残間理恵・Foster, M. (1998) 身体接触に反映された親子関係の文化的差異(3): 日本とボリビアの親子間の身体接触頻度の発達的变化 東北心理学研究, 48, 48.
- Hofstede, G. (1983). The cultural relativity of organizational practices and theories. *Journal of International Business Studies*, 68-85.
- Hofstede, G. (1985). The interaction between national and organizational value systems (1). *Journal of Management Studies*, 22, 347-357.
- 池田幸恭 (2017). 感謝に伴うすまな感情の検討, 和洋女子大学紀要, 57, 65-74.
- 入山章栄 (2012). 世界の経営学者はいま何を考えているのか 英治出版
- Izard, C. E. (1971). *The face of emotion*. NY: Appleton-Century-Crofts.
- Jones, S. E. & Yarbrough, A. E. (1985). A naturalistic study of the meanings of touch. *Communication Monographs*, 52, 19-56.
- Jourard, S. M. (1966). An exploratory study of body-accessibility. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 5, 221-231.
- Jourard, S. M. & Rubin, J. E. (1968). Self-disclosure and touching: A study of two modes of interpersonal encounter and their inter-relation. *Journal of Humanistic Psychology*, 8, 39-48.
- 唐澤真弓・官 智絵美 (2010). 幸せと文化——ボジティブ心理学への文化的アプローチ——現代のエスプリ, 512, 141-151.
- 川名好裕 (2008). 対人関係における身体接触の位置づけ 明治大学心理社会学研究, 3, 59-66.
- Keltner, D. & Buswell, B. N. (1997). Embarrassment: Its distinct form and appeasement functions. *Psychological Bulletin*, 112, 250-270.
- Keltner, D. & Harker, L. (1998). The forms and functions of the nonverbal signal of shame. In P. Gilbert & B. Andrews (Eds.), *Shame: Interpersonal behavior, psychopathology, and culture* (pp.78-98). NY: Oxford University Press.
- Keltner, D., Horberg, E. J., & Oveis, C. (2006). Emotional intuitions and moral play. *Social Justice Research*, 19, 208-217.
- 木村昌紀 (2006). 感情の表出とコミュニケーション感情研究の新展開 (北村英哉・木村 晴 (編)), ナカニシヤ出版, 223-241.
- 北村英哉 (2002). 感情状態と情報処理方略(1)——MAGK 仮説をめぐって—— 東洋大学社会学部紀要, 40, 61-74.
- Klopf, D. W. (1998). *Intercultural encounters: The fundamentals of intercultural communication* (4th ed.). Englewood, CO: Morton.
- Knapp, M. L. & Hall, J. A. (1997). *Nonverbal communication in human interaction* (4th ed.). Fort Worth, TX: Harcourt Brace College Publishers.
- 蔵永 瞳・樋口匡貴 (2011). 感情生起状況における状況評価が感謝の感情体験に及ぼす影響 感情心理学研究, 19, 19-27.
- Layous, K., Lee, H., Choi, I., & Lyubomirsky, S. (2013). Culture matters when designing a successful happiness-increasing activity: A comparison of the United States and South Korea. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 44, 1294-1303.
- Levesque, M. J., Steciuk, M., & Ledley, C. (2002). Self-disclosure patterns among well-acquainted individuals: Disclosers, confidants and unique relationships. *Social Behavior and Personality*, 30, 579-592.
- Lustig, M. W. & Koester, J. (1996). *Intercultural competence: Interpersonal communication across cultures* (2nd ed.). NY: Harper Collins.
- Matsumoto, D. & Ekman, P. (1989). American-Japanese cultural differences in intensity ratings of facial expressions of emotion. *Motivation and Emotion*, 13, 143-157.
- Mazur, A. (1977). Interpersonal spacing on public benches in contact vs. noncontact cultures. *Journal of Social Psychology*, 101, 53-58.
- 中村 真 (1991). 情動コミュニケーションにおける表示・解読規則 大阪大学人間科学部紀要, 17, 115-146.
- 並川 努・谷 伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根 愛・野口裕之 (2012). Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討 心理学研究, 83, 91-99.
- 大平英樹 (2010). 感情心理学入門 有斐閣アルマ.
- 大崎正瑠 (2006). 日韓異文化コミュニケーションの研究——在韓国日系企業のアンケート調査より——東京経済大学紀要コミュニケーション科学, 24, 215-228.
- 大崎正瑠 (2015). 日本人の異文化コミュニケーション DTP 出版.
- Patterson, M. L. (2011). *More than words: The power of nonverbal communication*. Editorial aresta. (大坊郁夫 (監訳) (2013). ことばにできない想いを伝える——非言語コミュニケーションの心理学——誠信書房)
- Pedersen, D. M. (1973). Self-disclosure, body-accessibility, and personal space. *Psychological*

Mar. 2022

感情伝達における接触チャネルの使用に関する研究

- Reports*, 33, 975-980.
- Remland, M. S., Jones, T. S., & Brinkman, H. (1995). Interpersonal distance, body orientation, and touch: Effects of culture, gender, and age. *Journal of Social Psychology*, 135, 281-297.
- Richmond, V. P. & McCroskey, J. C. (2004). *Nonverbal behavior in interpersonal relations* (5th ed.). Pearson Education, Inc.
- Scherer, K. R., Johnstone, T., & Klasmeyer, G. (2003). Vocal expression of emotion. In R. J. Davidson & H. H. Goldsmith (Eds.), *Handbook of affective sciences* (pp.433-456). London: Oxford University Press.
- Scherer, K. R., Wallbot, H. G., Matsumoto, D., & Kudoh, T. (1989). Emotional experience in cultural context: A comparison between Europe, Japan, and the United States. In K. R. Scherer (Ed.), *Facets of emotion*. NJ: Laurence Erlbaum.
- Sophie, T. E. & Debra, J. (2015). Hello stranger! Trust and self-disclosure effects on online information sharing. *International Journal of Cyber Behavior, Psychology and Learning*, 5, 42-55.
- Stier, D. S. & Hall, J. A. (1984). Gender differences in touch: An empirical and theoretical review. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 440-459.
- 鈴木晶夫・春木 豊 (1989). 対人接触に関する試験的研究 早稲田心理学年報, 21, 93-98.
- Thayer, S. (1988). Close encounters. *Psychology Today*, 22, 31-36.
- Tracy, J. L. & Robins, R. W. (2004). Show your pride: Evidence for a discrete emotion expression. *Psychological Science*, 15, 194-197.
- 山本恭子・鈴木直人 (2005). 他者との関係性が表情表出に及ぼす影響の検討 心理学研究, 76, 375-381.

(2022年2月1日掲載決定)